

(1) 明日も来たいと思う東山小を目指して

四万十市立東山小学校
中山 加奈江

1. はじめに

昨年度赴任してきて、不登校担当教員となり、まず着手したのは児童の実態把握であった。本校の気になる児童の資料を見て、長期欠席者だけでなく登校渋りの児童が多いことから、これらの児童の過去の出席状況を拾い上げ、その理由など分かる限り調べてみた。友だち関係で悩みやすい児童、冬場に弱い児童、家庭環境等、児童らの実態と背景を把握したうえで、これからの手がかりとして活かしたいと考えた。コロナ禍の為、長期休みがあったり、マスクをしていることで顔の表情が分かりにくかったりしたことから、初めは顔と名前がなかなかつながりにくく距離を縮めるのに難しかったが、ピックアップした児童についてはいち早く顔を覚え、プラスワンの声掛けをしながら、子どもたちとつながることから始めた。また、欠席理由や遅刻理由が気になる理由の児童について担任に電話連絡を要請したり、時には迎えに行ったりして迅速な対応に努めてきた。

初年度は、早期発見、早期対応を学校全体でも意識して取り組んできた。適応指導教室に通う児童の学校に来る時間が増えたり、1年以上も学校に来なかった児童が行事に参加したりするなど取り組みの成果もみられたが、新規の長期欠席者や別室登校する児童が出現するなど、成果ばかりではなかった。

そこで今年度は、その反省も踏まえて、未然防止に力を入れたいと全教職員で確認するところから始めた。

2. 前年度の取り組み

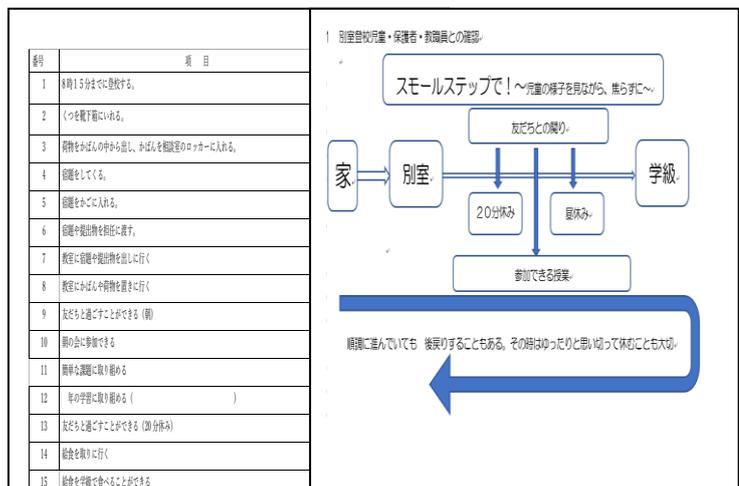
(1) 欠席者の状況

一昨年度より長期欠席者は複数名いたが、新規の30日以上欠席者が加わり4名となった。それ以外にも20日以上欠席者もいた。その新規の児童らは2学期後半より別室登校となり、3学期はほとんど欠席することもなく登校できた。その他にも別室登校児童がおり、その子らも学習できる時間は教室に帰ったり、特別教室で一緒に学習したりできた。

(2) 教員の不登校に対する認識と対応力の向上

各専門機関からのアドバイスを生かした校内支援委員会は月に一度定期的に行ってきたが、その他にも気になる児童について適宜ミニ支援会を行ってきた。その際、担任、養護教諭、時にはSCや管理職も交え、校内支援会で確認した支援の仕方がどうであったかのか振り返りをしながら次のステップを一緒に考えた。

また校内研修では、不登校担当教員が、スキルアップ研修等で得たことを校内研で伝達してきた。気になる児童が増えたりするなど、今後登校渋りや長期欠席者につながりそうな児童がいる学級について校内研で取り上げ、Q-UをもとにSCから助言をもらったり、全教員がそれぞれの立場でどのような支援ができるかと話し合う場を持ったりするなど担当としてコーディネートしてきた。

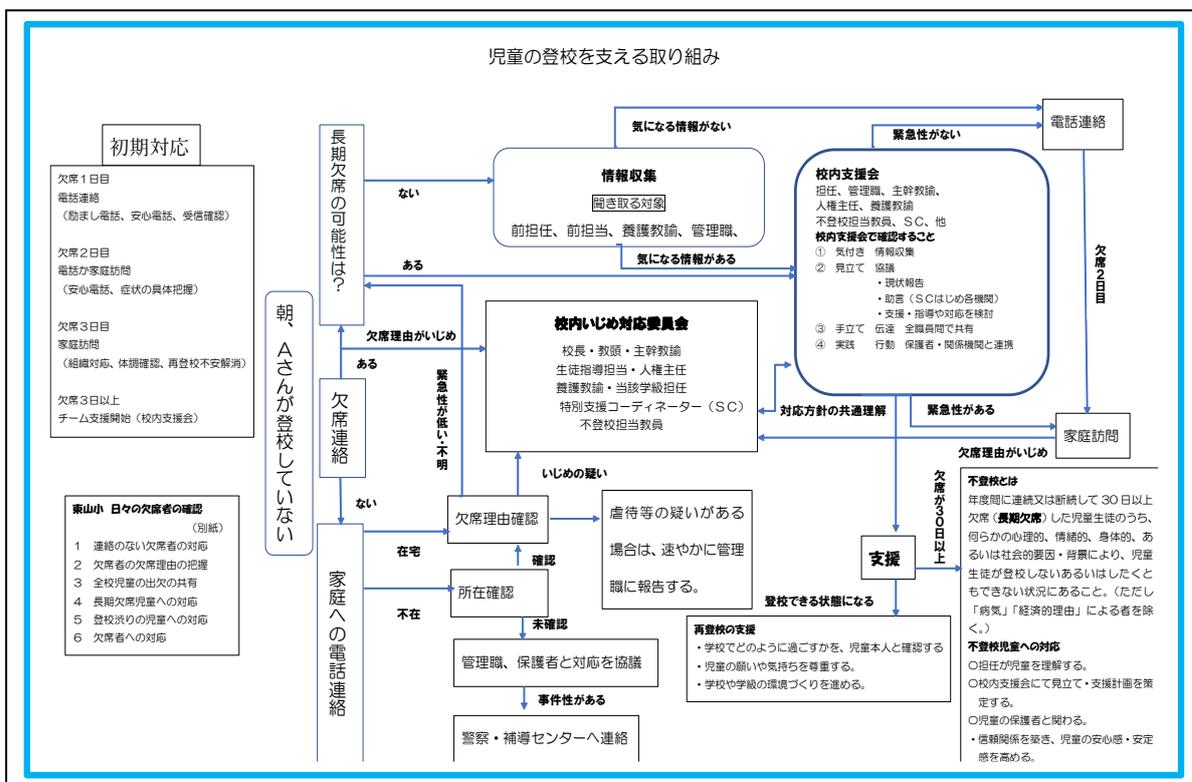


(3) 支援体制の整備

児童の出欠は校務支援システムで分かるようになったが、朝の段階で欠席状況の行き違いないよう、靴箱で担当がチェックし、連絡が来ていない児童については担任もしくは担当が電話連絡をしている。漏れや落ちがないよう一日の流れを確認するシートを作成した。

気になる児童の登校を支える取り組みもワンペーパーにし、若年教員だけでなく、誰もがそれぞれのパターン、どの流れで動けばよいか分かるよう体制を整備し確認を行った。

欠席者の確認についてお願いしたいこと	
①	連絡のない欠席者への対応 8:15 担任：職員室に問い合わせる。 ↓ 中山：職員室の担任の机にメモがないか確認する。 ↓ 中山：児童宅に確認する。(8:30分以降) ↓ 中山：担任に伝える。
②	欠席者の欠席理由を把握 8:30 担任：朝の会で健康調べをした後、教室前に「健康調べ」をかける。 ↓ 有田先生・中山：回収する。 ↓ 欠席理由等を確認する。 ※健康調べに書けない理由については、中山もしくは有田先生に伝えてくだ
③	出欠ボード 10:20 担任：職員室の出欠ボードを確認する。



3. 今年度の取り組み

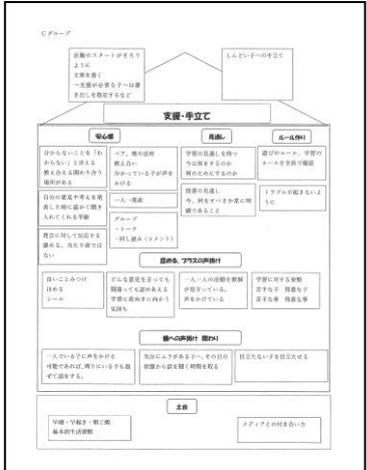
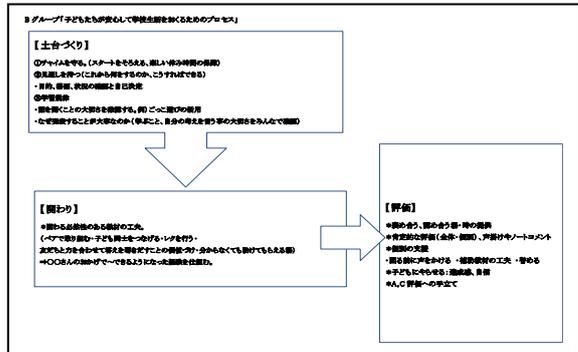
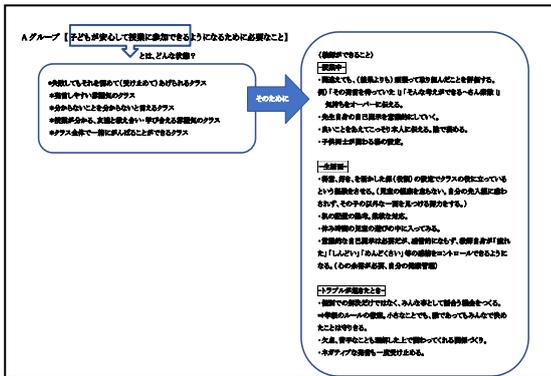
(1) 未然防止にむけて

① 校内研修での拡大支援会

昨年の反省をもとに今年度は「未然防止」に力を入れる事を確認して出発した。学力部会・授業づくり部会は、児童らの学力での躓きを補うために、また「やって楽しい。わかった。またしたい」授業の為の提案をし、児童理解部は、人間関係づくりを中心に取り組みを考え、提案してきた。いろいろな角度から不登校や問題行動を未然に防げられるよう、生徒指導の三機能を働かせた学級づくり・授業づくりを意識してきた。夏季休業中には校内研修を使って「わかる、楽しい、もっとやりたい」と思える授業づくりについて話し合い、2学期から意識して取り組むことを確認した。また、学校生活アンケートやQ-Uから気になる児童について確認し、「子どもが安心して授業に参加できるようになるために何が必要か」をグループで討議し、全体で確認し、各々が2学期を迎えた。

校内拡大支援会の様子

グループで「子どもが安心して授業に参加できるようになるために何が必要か」について話し合い、2学期から特に何について頑張るかを各々が発表し合った。参考「第1回不登校担当教員スキルアップ研修資料」



②生徒指導の三機能を働かせた学級経営

個のニーズに応じた支援を可能にし、一人一人が大切にされる学級・授業づくりの生徒指導・ユニバーサルデザインの視点から学級経営のポイントとなる項目をあげ、学年で話し合い、個人でもチェックシートで確認したりした。

学級づくりのポイント

1 教室環境と学習環境の整備

2 学習や行動のしるしを明確にする

3 授業の工夫

4 一人ひとりに対しての支援

授業に生徒指導の機能を生かすためのチェックリスト

名前	1学期	2学期	3学期
子どもが、自分の考えをペアやグループの前で発表する機会を持っている			
授業や学習の進捗状況を把握している			
名前を呼んだら、目を覚まして返事をするなど、先生に存在を認めている			
「静」と「動」の活動を組み合わせて、授業にメリハリをつけるようにしている			
授業の中でよくできたね、「がんばってるね」等の、褒めや励ましを行っている			
不適切な行動に対しては、注意だけでなく適切な行動をおさそうようにしている			
たとえどんな理由でも悪い行動を繰り返す場合は、前例のない罰や制限のようになっている			
チームと同時に関与し、チームと同時に関与し、チームと同時に関与している			

「取り組んでいる」肯定的な評価 61.6% (6月) → 72% (11月)

③授業改善

主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業づくりを本校の研究主題に掲げ、自分の考えを表現することが楽しいと思える授業づくりを目指してきた。

人前で自分を表現することが苦手な児童、コミュニケーションが苦手な児童などいるため、外国語や国語の授業を中心に研究している。誰もが参加しやすく、分かりやすさを目指してユニバーサルデザインを取り入れた学級環境づくり、授業づくりに取り組んだ。



④安心・安全な学級づくり

昨年度は学校生活アンケートを2回行い、今年度もその予定であったが、更に子ども達が安心して学級で過ごせるように2学期よりアンケートの回数を増やし、より子どもらの声を聴けるようにし、その後Q-Uを取って実態を把握するようにした。

また、他者との関り方を学ばせるためにソーシャルスキルトレーニングを取り入れた「にこにこ朝会」を行ってきた。コロナ禍で制限も多く限られたことしかできなかったが、子どもたちはその日を楽しみにし喜んで活動していた。



⑤「明日も来たいと思う東山小」になるために

教職員間での合言葉が「明日も来たいと思う東山小」となり、それぞれがそれぞれの立場で何をすればよいか考え取り組んできた。本校は、長期休み明けや月曜日に欠席者が多いことから、栄養教諭が献立を考える際、始まりの日や月曜日には児童らの人気メニューやデザートをつけたり、季節行事を意識した催しを考えたりするなど「うれしい・楽しい給食」になるように、配慮してくれた。

大人からの投げかけだけでは児童らの意識は変わらないと考え、各学級で児童らにも「明日も来たい東山小にするには？」

児童会目標 「明日も来たい東山小にするために！」

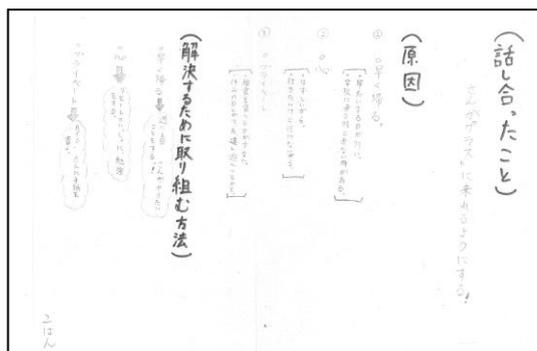
- 4月：元気な声であいさつをしよう
- 5月：学校のきまりをまもろう～声をかけあう
- 6月：衛生に気をつけよう～マスクをつける
- 7月：友だちを大切にしよう～されて嬉しい事をする
- 9月：元気な声であいさつをしよう～自分からする
- 10月：笑顔を心がけて生活しよう
- 11月：相手の立場に立った行動をしよう
- 12月：友だちを大切にしよう
- 1月：元気な声であいさつしよう～自分からする

と考えさせたところ目標を「明日も来たい東山小にする為に何をしたらよいかを目標にしよう」と児童会から意見が出て全校に浸透した。委員会の取り組みでもそのことを意識して活動している。

また、児童会を中心とした「なかよしロングタイム」だけではなく、リーダー育成を目的にした縦割り班による「なかよしロングタイム」や体育委員会主催の「体育朝会」なども実施し自治活動を通して自己有用感を持たせるようにしてきた。



その他にも、学級に入りにくい児童がいるクラスで、国語の話し合い活動の単元の際、児童らが自発的に「〇〇さんがクラスに来られるようにするには？」と課題設定し、原因を考えたり解決するために何をしたらよいかを考えたりしながら、教室に帰ってこられる方法を導き出そうとしていた。その思いや変わらない温かな気持ちが伝わって、その児童も大きな行事に参加することができた。



⑥別室や保健室での対応

児童らが渋りながらも登校した際、すぐに教室に行くことができないことがある。そんな時は、保健室や別室で養護教諭や不登校担当教員が対応している。理由に対して説明できる児童ばかりではない。じっくり、ゆっくり気持ちを変えエネルギーを蓄えさせてから教室に送っている。その際、担任や友だちに迎えに来てもらうと帰りやすい児童が多いので、そのような児童の気持ちを担任や児童らに伝える橋渡しもしている。

また、コミュニケーションの取り方が難しい児童らには、ゲームをしたり、プリントをしたりしながらソーシャルスキルトレーニングも行っている。学習に向かいにくい児童らの学習保障については今後の課題である。



(2) 校内支援会の活用

校内支援会では個別の支援シートをP D C Aサイクルで作成し、毎月の取り組みを振り返り、次の目標の確認等を行っている。担任やそれぞれ関わる者が確認できるよう一本化していることで支援のブレがない。また、中学校へも資料として渡せるので支援がつながる利点もある。

校内支援会には、スクールカウンセラーや教育研究所、心の教育センターなど外部からも参加してもらい、専門的立場から授業参観をして気づいたことや今後の支援へのアドバイスをもらうなど継続的な関わりをしてもらっている。また、スクールカウンセラーには、年度当初に高学年との全員面談をし、児童らと自然に関わりながら、気づいたことを担任等に伝えサインの見逃しがないようにしてくれている。

(3) 成果と課題

- 不登校や問題行動未然防止のために、「明日も来たいと思う東山小」になるよう、学級担任だけでなくいろいろな立場で教職員一人一人が意識し「チーム東山」として一丸となって取り組んだ。
- 不登校の児童や不登校傾向の児童に担任と担当らとの連携で支援・指導ができ、担任の負担感が減った。
- 保護者への寄り添いを、担任とともに不登校担当教員も行うことができ、窓口が広がった。

●新規不登校の出現

●いじめ案件・暴力案件の出現

学校生活アンケートやQ-Uをみても全ての児童にとって、安心・安全な学級づくり、学校づくりができていたとは言い難い。全ての児童にとって「楽しい・あったかい・安心できる」と思える学校・学級、すべての児童が「わかる・楽しい・もっとやりたい」と思える授業づくりを今後も取組を検証しながら進めることで不登校・問題行動が改善されるのではないかと考える。

4. 今後に向けて

昨年度の課題として、不登校にしても、問題行動にしても事象が起こってからの対応ということが多かった。その反省を生かし今年度は「未然防止」に力を入れてきた。新しい取り組みをするのではなく、授業も行事も日々の声掛けなど日常の些細なことも、子どもたちに「明日も来たいと思う東山小学校」に思わせるにはどうしたらいいかを念頭において、皆が意識しながら考え動くことが未然防止になるのではないかと考えた。それは、教職員だけで「来たい東山小」をつくるのではなく、児童にも保護者にも地域にも呼びかけ、それぞれができることを考え、行動しなければならない。まだまだ課題は多く、不登校問題も問題行動も一朝一夕には解決できない。いろいろな場面で児童らが「楽しかった」「もっとやりたい」という気持ちになれば「明日も来たいと思う東山小」になると思われる。その為に今後も「安心して過ごせる学級・学校づくり」を目指したい。